
roach with one step ,two steps, three steps

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Approach with one step , two steps , three steps

【Nコード】

N8095Y

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

武内苑子の片思いの相手は、2番目の兄の後輩である内藤駿介。基本無愛想で無口な駿介と同年代の男の子がちよっと苦手でオクテかつ人見知りな苑子。この二人の距離が近づいてく過程を書く予定です。

「泰斗高校恋愛事情シリーズ」第2弾です。

第1弾”図書委員会の恋愛事情”の中に掲載されている「武内苑子の〜」で始まるタイトルの続編にあたります。第1章の頭に簡単に

今までの流れを書いています。 ” 図書委員会 ” を読むと詳しく書いてあります。

第1章：おまけの誘い（前書き）

前作”図書委員会”で長くなりそうなので、独立させるとお知らせした武内苑子の恋愛話です。

お待たせしましたって・・・書いていいのかな。

第1章：おまけの誘い

私は武内苑子です。泰斗高校の1年生です。最近、兄のおかげで知り合った専心館高校3年生の内藤駿介さんは、入学して間もなくの連休明けの通勤ラッシュで私を助けてくれた人でした。

顔を見るだけでラッキーだったのに、思いがけず兄のおかげで知り合ったあの人は、寡黙だけど優しく、初めは1年生の私にも敬語だったけど文化祭の頃には普通に話してくれました。

最初は、ちよつと関わられただけで嬉しかったのに、私は、もっと近づきたいと思ってしまうのです。

欲張りです、私。

今日は泰斗祭の振替休日。部屋でのんびりしていた私のところに、聡太お兄ちゃんが顔を出した。

「苑子、来週の日曜日は空いてるか？」

聡太お兄ちゃんから渡されたのは、20枚ほどの食券と書かれた紙。

「へ？」

「来週の専心祭の食券。やるから、来週俺につきあえ」

「えっ！なにそれ。」

「内藤が「妹さんと一緒にどうですか」ってくれたんだよ。俺がOBでなおかつ内藤の先輩でよかったなあ！！苑子」

「えーっ！！」

（お兄ちゃんメインだけど）内藤さんが専心祭に招待してくれた！！どうしよう。なにを着て行ったらいいのかな。学校行ったら、樹理ちゃんに相談しなくちゃ。

お昼休みに樹理ちゃんに昨日の件を相談したら「制服にしときなさ

いよ。迷子になっても分かりやすいから」とアドバイスされた。

でも、迷子って・・・「樹理ちゃん。私が迷子になること前提？」
樹理ちゃんは「あはは、ごめんごめん。でもさ、目印になるから内藤さんも探しやすいとおもうけど?」と笑う。

内藤さんが探しやすいとなぜ、内藤さんがここに。私は思わずきよとんと樹理ちゃんを見てしまった。

「内藤さんって、食券だけ渡して放り出すような人？違うでしょ。きつと案内してくれると思うけどなあ。苑子!!これはチャンスだよ。がんばんな!!」

「そうくんがメインで、私はオマケなんだけど・・・」でも、でも・・・内藤さんが案内してくれる可能性があるのかな。

「何がチャンスなの?」と、突然男の子の声がした。

座っている私たちを見下ろすように、高野くんがパンの袋を持って立っていた。

「ちょっと高野くん。急に現れないでよっ」

「ごめん。チャンスって、何のチャンスなんだろうと思って」

「あの、高野くん。チャンスっていうのは私の話で、樹理ちゃんには相談に乗ってもらってるだけなの。だから、気にしないでいいよ?」

「え・・・。武内さんの?そうなんだ・・・」高野くんは、なんだかちょっとへこんで、友達のほうへ歩いていった。

「樹理ちゃん。高野くんがへこんでたみたいだね。」

樹理ちゃんに言うと、樹理ちゃんは高野くんのほうをチラッとみて「ふん。この程度でへこむなんて・・・やっぱりダメだわ」とボソツと言った。

「何がだめなの?」私が聞くと、樹理ちゃんは「ん?苑子は気にしなくていいんだよ。それより、苑子。専心祭の報告、楽しみにしてるからさ」と、素敵な笑顔でサラッと言った。

第1章： おまけの誘い（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

ストックが少したまりましたので、UPしてみました。

この作品でも、聡太は暗躍（笑）の予定です。話には出てくる、長兄・伊織も登場させたいなあ〜と思っています。

第2章・専心祭 - 1 (前書き)

苑子、へこんだり浮上したりする。の巻。

第2章：専心祭 - 1

結局、私は制服を着て専心祭に行くことにした。

私は、いつになく何度も玄関の鏡の前で制服を見直した。髪の毛、OK。おろしたての紺色のハイソックス、OK。前日によく磨いた靴、OK。制服、リボン（ちなみに1年生はモスグリーンだ）、スカートのプリーツ、OK。

聡太お兄ちゃんに、現場を見られて「苑子、気合入ってんなあ」と笑われてしまった・・・恥ずかしい。でも、内藤さんが案内してくれる（勝手に想像）かもしれないんだから、どうしても気にしてしまふ。

途中で、聡太お兄ちゃんが剣道部への差し入れを買うのに付き合っている、開始時間すこし過ぎた頃に専心館高校に到着。

「こんにちはは、聡太先輩、武内さん」人で混み始めた正門に、内藤さんが立っていた。

「こ、こんにちははつ。」私はどぎまぎしながら、お辞儀をした。

「あれ、どうした内藤。彼女と待ち合わせか？」聡太お兄ちゃんが不思議そうに尋ねる。

彼女・・・そっか。内藤さんに彼女がいてもおかしくないよね・・・私は、なんだか急に気合を入れた自分が恥ずかしくなってしまうた。

「俺、彼女いませんから。先輩たちを案内しようと思って待ってたんです。先輩のことだから、混みあう前にくるかと思って・・・正解でしたね」と内藤さんが笑う。

「お。そっか。悪いなあ。俺はよく知ってるけど、苑子は知らないからな。助かるな。」

「内藤さん、ありがとうございます」私も聡太お兄ちゃんにならうてお礼を言う。

すごい、樹理ちゃんの予想が当たったよ！！ あと、彼女いないって言ってた・・・一転、私は気持ちが浮上していく。

「じゃ、まずは剣道部に行くか。差し入れ持ってきたからな」聡太お兄ちゃんがビニール袋を持ち上げた。

「ありがとうございます。剣道部は今年、ポップコーン売ってるんですよ」

「昨年も、ポップコーンだったよな。俺、売った覚えがあるんだけど」

「昨年は塩だけでしたけど、今年は味が増えました。メープル味と塩の2種類です・・・武内さん、好きな注文していいからね」

「は、はいっ。ありがとうございます」急に内藤さんに話しかけられて、動揺してしまった。拳動不審に見られたら、どうしよう。

正門から校舎入り口に続くメインの通路沿いに様々な模擬店が並んでいる。

剣道部は、ちょうど真ん中に模擬店を出していた。

聡太お兄ちゃんが顔を出すと、2年生や3年生（と思われる）は、「聡太先輩。お久しぶりです」と次々と挨拶していく。1年生も、先輩に続いて挨拶していく。

挨拶してきた部員に、聡太お兄ちゃんは、私を「妹だ。泰斗の1年生なんだ」と紹介するんだけど・・・みんなの視線がなんか、がっかりしているみたい。

確かに、これといった特徴のない外見だからなあ・・・お兄ちゃんたちは、父に似て端正で精悍な顔立ちしてるから、母似の私とあんまり似てない。

やっぱり、内藤さんも私が残念な妹だと思っているのかな・・・そう思っつて内藤さんをチラリと見ると、私の横にいた内藤さんと目が合ってしまった。

「どうしたの？」内藤さんが不思議そうに聞く。

「い、いえっ。兄っつて剣道部で慕われてるんだなあ、と思っつて。」

「聡太先輩は、稽古中は厳しいけど普段は気さくだからね。家でも、あんな感じ?」

「うーん・・・家では、いつも伊織兄さんにやられっぱなし、かな」私は家での聡太お兄ちゃんを思い出してしまった。

「伊織さんって、どんな人?」内藤さんは、私たちの話しによく出てくる伊織お兄ちゃんに興味をもったみたいだった。

「優しくて頼りになる兄です。小学生の頃、私が男の子に泣かされると、必ず伊織兄さんがなぐさめてくれて。宿題や受験勉強もみてくれました。」私を泣かせた男の子は、翌日からちよっかいを出さなくなっただけど、なぜか怯えているように見えた。

「へえ。」

「優しいのは苑子にだけ。伊織兄さんは、苑子には激甘。」いつものまにか挨拶が終わったらしく、聡太お兄ちゃんが内藤さんとの会話に割り込んできた。

「さ、あちこち見て回ろうか。苑子、ポップコーンはあとで買ってやるから我慢しろよ?」

「そうくん!!」もー、まるで私がお腹すいて我慢できないみたいな発言は止めてほしいっ。

第2章：専心祭 - 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

第2章から気持ちを自覚した苑子の一喜一憂が始まる・・・はずです。

・2 (前書き)

ベタなごまかし。の巻

体育館で男子体操部の男子新体操を見て（このためだけに、器具を購入してあるそうだ）、模擬店で食券を使いながらぶらぶら見て回り、午後2時頃には最高潮に混み始めた。

人混みがきらいな聡太お兄ちゃんは「苑子、ポップコーン買ったら帰るぞ」と言い、私も緊張で疲れ気味なので、賛成した。

内藤さんも、3時から当番だそうで、帰るにはちょうどいい時間かも。

「じゃあ、ポップコーン買いに行きましょうか」と内藤さんが言うと、聡太お兄ちゃんが「俺は、正門で待ってるから、苑子だけ並んでこいよ。俺はもう、並ぶのはいやだ。内藤、悪いけど苑子を正門まで連れてきてくれよ」と言い出し、さっさと正門まで行ってしまった。

「ちょっと、そうくん！！もう、信じられないっ！！」私は、聡太お兄ちゃんの行動に唖然とした。

妹だからって、扱いが雑だよ！！バカ聡太！！ぜーったい伊織お兄ちゃんに言う！！

伊織お兄ちゃんに、お説教されればいいんだ。もうっ！！

内藤さんも、聡太お兄ちゃんの行動に呆然としているみたいだ。

「す、すいません。兄が・・・あの、内藤さん。私一人で行けますから、いいですよ？」

なんか、私いつも、内藤さんにお兄ちゃんの行動で謝ってない??

私が謝罪すると、内藤さんは「あの人は・・・強引だ・・・」とボソリとつぶやいたあと、私を見て

「聡太先輩の、ああいう行動は何か考えがあるんだと思うよ。・・・きつと。」とフォローしてくれる。

「ほんとに、すいません・・・」

「俺、時間はあるから。武内さんは気にしなくていいよ。」

「内藤さんも、3時から販売に回ると聞きました。」

「そう。でも、俺、愛想がないから販売苦手なんだ。」内藤さんが苦笑い。確かに、内藤さんって苦手そうな感じがする……。

「私は内藤さんのそういうところも、好きです」

「え」内藤さんが聞きかえす。

私、今……何言った？

私……告白っぽいこと、言った???

「え、えーと、ポップコーンが好きですって言ったんです」慌てていづくろつ。

「そっか。昨日、試食したんだけど結構美味しいよ。聡太先輩の妹だから、おまけしてあげるね」

よかった、周囲が騒がしくて、内藤さんには聞こえてないみたい。でも、言葉に出して自覚してしまった。私、内藤さんが好きなんだ。

何事もなかったように、メープル味のポップコーンを購入した私は、内藤さんと一緒に正門で待っている聡太お兄ちゃんのところへ行った。

聡太お兄ちゃんは私の横にいる内藤さんを見て、なぜかニヤリとして内藤さんに何事か話していた。内藤さんは、なぜかちょっと慌てた様子になり、聡太お兄ちゃんはそんな内藤さんの肩をたたいていた。

その後、私は、むやみにご機嫌な聡太お兄ちゃんの様子を不気味に思いながら帰ったのだった。

- 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

うおゝ、ベタだ、ベタだよ。

読んでいただいている方にドン引きされたらどうしよう。

(自分で書いておいて言うのもなんですが)
次回は、聡太サイドの話になります。

- 3 : 武内聡太の観察(前書き)

聡太は見た!の巻

- 3 : 武内聡太の観察

泰斗祭から数日後、「聡太先輩、来週の専心祭の食券もらったのですが、妹さんと一緒にどうですか」と内藤から食券の束を渡された。

「苑子と？」内藤がこんなこと言うなんて珍しいな。

「はい・・・この間のお菓子のお礼ということだ。」

「あゝ、あのケーキか」確かに、苑子の作るお菓子はうまい。ちなみに料理も美味いぞ。しかし、俺はあれから苑子の家庭教師と化している。ケーキの代償はでかった。

「はい。」

「本人に美味かったって伝えてやれよ。電車で会うだろ？」

「い、いや・・・それはちょっと・・・」うわー、内藤が動揺している??

苑子は、本人が鈍いので自覚してないだろうけど、第三者から見ると内藤の事が好きなんだろうというのは丸分かり。

俺としては、妹に好きな男が出来たというのは何だか複雑な気分だけど、妹は見る目があるじゃん、とも思っている。無愛想で無口な奴だけど、内藤は信頼できる人間だからだ。

以前、内藤が苑子のことを「小動物みたいで面白い」って言うってたけど、この動揺ぐあいには認識を改めたんだろうか。気になる。

俺は目の前で「と、とにかく。食券をお渡しますから来てください」と焦り気味の内藤が、何だか面白いので、俺は「ありがとう。苑子を連れて差し入れを持っていくよ」と受け取った。

苑子は出かけるまえのチェックに余念がない。俺たちと出かけるだけのときは雲泥の差だ。兄ちゃんは少し複雑だぞ。

専心祭に行くと、内藤が正門で待っていた。まあ、内藤の性格からして券を渡しただけで終わりってことはないだろうと思っていた

けど、正門で待っていたのには正直驚いた。剣道部の模擬店に向かうまでの間、二人と会話をしていた気がついた。いつの間に、内藤は苑子に話しかけるときの敬語をやめたんだろう。

その後も、苑子を見る剣道部の後輩に対しての、内藤の視線の厳しいこと。苑子に話しかけようとする部員たちが、皆ひるんで俺に挨拶し、苑子をチラッと見て持ち場に帰っていく。

その後も、内藤は苑子が人にぶつかりそうになると、さりげなくかばったりして、本当に伊織兄さんみたいだった。もしかして、内藤って伊織兄さんみたいなタイプか・・・守りたいものにはとことん過保護になるタイプ。一度、二人を会わせてみたいけど、同族嫌悪か類は友を呼ぶかどっちになるだろう・・・。

だいぶ混雑してきたのと、内藤の当番の時間が迫ってきたので、俺たちは家に帰ることにした。その前に、俺は苑子だけをポップコーンを買に行かせる。苑子はぶつぶう言っていたけど、俺には俺の思惑があるんだ。

戻ってきた苑子は相変わらず俺のことを勝手だと怒っていたが、内藤は俺がわざと二人きりにしたのに気づいたみたいだった。

苑子に聞こえないように「お前さ、剣道部の連中が苑子に話しかけようとするのを、邪魔したたる」と内藤に言った。

「えっ。なんで知って・・・」内藤はちよつと焦って口をつぐんだ。「いくら心配だからって、お前、過保護すぎ。」

「・・・そうでしたか？」試合のときの鋭さなんて今の内藤には微塵もないな。こいつも普通の男だったか。

「それとも、小動物から別のものに変わったか?・・・ま、苑子が付き合う相手は、俺はお前ならOKだけど、伊織兄さんの攻略法は一緒に考えてやるからさ。」と俺は内藤の肩をたたいた。

内藤が戸惑うのをよそに、俺はなんだか楽しくなってきた。苑子と内藤が付き合うことになったときの、伊織兄さんが見てみたいもんだ。

その後、俺は苑子から「なんで、そんなに機嫌がいいの？気持ち悪いなあ」と不気味がられてしまった。

- 3 : 武内聡太の観察（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

「家 婦は見た」ならぬ聡太は見た、です。

第3章・自分でがんばる・1（前書き）

苑子の奮起。の巻―その1

第3章：自分でがんばる - 1

季節は冬休みがあと1ヶ月というときに、私は内藤さんの誕生日を知った。

知ったきっかけは、いつもの朝の電車でのこと。

私は毎年、兄たちの誕生日にケーキを焼く。私がケーキを焼くようになってから毎年恒例になっていて、5月は伊織お兄ちゃん11月は聡太お兄ちゃん。そして1月の私の誕生日には兄二人がプレゼントをくれる。ちなみに、昨年もらったのはムーミンキャラクターのマグカップとプレートだ。北欧特集のテレビを見ていて、「あのマグカップ、かわいい」って言っていたのを聡太お兄ちゃんが聞いていたらしく、私に内緒で用意してくれていた。

こんな話をしていたら、内藤さんが「俺は来月誕生日なんだけど、今年は勉強だなあ」と言った。

「あ、あの。」

「どうしたの？」

「えっと……」誕生日教えてください……と言いかけたところで、私の降りる駅に到着してしまい、私は内心がっくりしながら、内藤さんに挨拶して電車を降りたのだった。

誕生日……聞けなかった……聡太お兄ちゃんなら知っているかな。帰ったら聞いてみよう。

家に帰って、夕飯後に私は柿とバナナをいれたカップケーキを焼き始めた。お菓子も料理も作っていると気分が楽しくなってくるから不思議。

オーブンに入れて、ケーキが膨らんでくるのを見るのは至福のときだ。

「学校で、樹理ちゃんと食べよう」私は焼きあがりに満足した。

「お。なんかいい匂いがする」と聡太お兄ちゃんがキッチンに顔を

出した。

「そうくんの誕生日に焼くケーキの試作を試してみたの。」

「お。そっかー、柿とバナナ？へー、面白いものを入れるんだな。」

「そうくんは、今年の誕生日当日は彼女さんと出かけてたよね。今年もそう？」

「今年は、当日でいいよ。」聡太お兄ちゃんがサラリと言った。

「ふうん。わかったよ」・・・ほろ苦いチョコレートケーキでも焼いてあげようかな。

なんてしみみりしたけど・・・当の聡太お兄ちゃんは、焼いたカップケーキに手を出して「苑子」。これ美味しいな！俺、ケーキ、これがいい！」と嬉しそうだ。

・・・なんか、気を使わなくていいらしい。

それに、今なら内藤さんの誕生日が聞ける。

「ねえ、そうくん。・・・内藤さんって誕生日いつ？」

「は？内藤の誕生日？」ケーキを食べ終えた聡太お兄ちゃんは一時不思議そうな顔をしたものの、次になぜか、ニヤニヤしはじめた。

「そうくん、笑顔が気持ち悪いよ」

「失礼な・・・ふうん、内藤ね・・・いいんじゃないの？」

「知らないならいいよ」

「クリスマスだよ」

「へ？」

「だから、内藤の誕生日はクリスマス。毎年ケーキがクリスマスケーキと一緒に嬉しいぞ・・・あげたら喜ぶだろうねえ・・・なんなら、かわいい妹のために内藤を家に呼んでやろうか？」

「だ、だめっ。クリスマスなんだから、内藤さんも用事あるだろうし・・・勉強の邪魔しちゃ悪いし・・・」

「・・・一日くらいの息抜きで、ダメになるくらいの勉強なんか、あいつはしてないと思うけど？」

お兄ちゃんに頼むと、用事がない限り内藤さんは家に来てくれる

けど・・・でも、やっぱり自分で決めたことだから、自分で頑張る。

「ううん・・・私、自分で頑張る」

「お。・・・そうか。」

ちょっと、聡太お兄ちゃんが寂しそうに見えたのは、気のせいかな。

第3章：自分でがんばる - 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

苑子が一人でがんばると決意して、聡太はちょっと寂しいらしい。ところで、柿(完熟したもの)とバナナをつぶしてホットケーキミックスに混ぜると、甘めのパンになります。

ツクパッドで見つけたレシピにバナナを加えてみたのですが、簡単にできて美味しかったです。

・ 2 (前書き)

苑子の奮起。の巻―その2

今朝、日直なので内藤さんと会う1本前の電車に乗った。日直だからしょうがないけど、内藤さんと話をしない日は、なんか寂しい。この日は、聡太お兄ちゃんに頼まれて私は駅前の大きな本屋に立ち寄っていた。取り寄せた本が入ったと連絡をもらったものの、兄はバイトで行けないらしく、私が頼まれた。

この本屋の参考書売り場で、内藤さんにバツタリ会ったんだよなあ。あの時はまさに「盆と正月がいつぺんにきた」だった……。

聡太お兄ちゃんに頼まれた本を受け取り、私は時間もあるので本屋の中を見て回ることにした。

本屋の中もクリスマスにちなんだコーナーが出来上がってて、絵本やお菓子の本、編み物の本なども置いてある。そこで、私は目についたお菓子の本を手にとった。

ブッシュ・ド・ノエル、チョコレートケーキ、イチゴのケーキ……うう、どれも美味しそう。いろんなカップケーキを作るのも楽しそう……本に熱中していると、隣から「武内さん？」と声をかけられた。

声のした方向に顔を向けると、そこには内藤さんが立っていた。

「な、内藤さん。偶然ですねっ」

「ちよつと、本を見に来たんだ。武内さんは？」

「私は、聡太兄さんが取り寄せた本を受け取りに。クリスマスコーナーがあったので、ちよつと立ち寄ってました」

「そのお菓子の本にすごく熱中してたね」と内藤さんが笑う。……そんな熱心に見てたか、私。恥ずかしい。

「その本、買うの？」

「え、えーと。きよ、今日は見にきただけですっ。」

「……じゃあ、一緒に帰らない？なんか前もこういうことあっ

たよね。」

「このまま一緒に帰ってもいいけど・・・もう少しだけ。」

「あ、あのっ。時間があつたら暖かいものでも飲みませんか？」私は、断られるのを覚悟して、誘ってみた。

内藤さんは、ちよつとびっくりしたみたいだけど「それもいいね」と賛成してくれた。

ショッピングモール内にあるカフェで、私はロイヤルミルクティー、内藤さんはコーヒーを飲む。

「あの」

「ん？」

「兄から、内藤さんの誕生日を聞きました。12月25日、クリスマス生まれなんですね」

「うん、そうなんだ・・・ケーキと一緒に、プレゼントもちよつと豪華だけど一緒。小さい頃はイヤだったなあ」と内藤さんは苦笑い。

「それで・・・その・・・」

「うん、どうしたの？」

「あの・・・ケーキを焼いてもいいですか？」

「え？」

「あの・・・日ごろ、兄がお世話になってるし。専心祭では案内してもらったし・・・お、お礼として」

「お礼なんて、別にいいのに」

「い、いいえっ。そういうわけには・・・迷惑なら言ってください。」

「・・・迷惑じゃないけど、大変じゃない？」

「いいえっ。大変じゃないです！」思わず私はムキになってしまった。

お店の人がこちらを見る・・・なんか、今日は恥ずかしいところばかり、内藤さんに見られてる。

「そ、それで。できれば、そのう、当日にお渡ししたいんですけど・
・あの、都合はいかがですか」

「俺は、家にいるから大丈夫だけど・・・クリスマスは武内さんに
予定はないの?」

「夜に伊織兄さんが帰ってくるくらいで・・・特にないです。じゃ、
じゃあ・・・あのつ。25日に渡しに行ってもいいですか?」

「え。家に?・・・うーん・・・家、その日俺のほかには兄貴
と弟が家にいるから、武内さんびっくりしちゃうと思うよ。だから、
外で待ち合わせでもいいかな」

「は、はい。あの、それじゃあ、メルアドを教えてくださいもいい
でしょうか」

「え?」

「あ、あの。待ち合わせ場所とか決めるとかに、必要だと、思って・
・」

「あ、そ、そうだね。」私たちは、お互いにあたふたしながら、メ
ルアドを交換した。

私は初めて父親と兄たち以外の男の人のアドレスを登録したのだ
った。

・2（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

この回は待つてるばかりじゃダメだと苑子が動きました。

第4章・クリスマスまでの過ごしかた。(前書き)

苑子の過ごし方。の巻

第4章：クリスマスまでの過ごしかた。

冬休みが間近になって、内藤さんは自由登校になっていた。朝に電車で会話ができなくなったけど、メールのやりとりをするようになった。

私たちも、期末が終わってあとは冬休みを待つばかりなので、結構気楽。

週明けの昼休みに、樹理ちゃんにメルアドを聞いたこととクリスマスにケーキを渡すことを話をしたら「すごい！苑子、頑張ったね」と自分のことのように喜んでくれた。

「ありがと、樹理ちゃん。私、がんばる」

「うん、がんばれ。で、どういうケーキを焼く予定なの？」

「甘すぎるお菓子は苦手ってメールに書いてあったから、甘さ控えめのケーキを焼こうと思って。それでね・・・」と私はカバンから袋を出した。

「何種類か焼いたんだけど・・・一緒に食べてみてほしいんだ。」

「おおっ。苑子のケーキ、久しぶり〜。」

「最初、そうくんに食べてもらおうかと思ったんだけど、そうくんって、何食べても美味しいしか言わないから、わからなくて。ごめんね、樹理ちゃん、実験ばいのにつき合わせちゃって」

「何言ってるのよ〜、苑子のケーキは美味しいからいくらでも付き合ってる」

樹理ちゃんは早くも、どのケーキにしようか迷っているみたいだ。

「このケーキ、どうしたの？」高野くんが、樹理ちゃんが選んだケーキに目を留めた。

高野くんって、樹理ちゃんがいるところによく顔を出すけど・・・
・やっぱり樹理ちゃんのこと、好きなのかなあ。

「高野には関係ないよ」と樹理ちゃんはそっけない。

「あ、あのね、高野くん。樹理ちゃんに試食を付き合ってもらってるの」

「試食？」

「う、うん。私が焼いたんだけど・・・」

「武内さんが焼いたの？」

「そうなの。」

「苑子が彼氏にあげるのは何がいいか考えてるんだよね」樹理ちゃんがニヤリと笑った。

「樹理ちゃんっ！」私は顔が赤くなってしまい何も言えない。内藤さんが彼氏になったら、どうしよう。ひゃ〜！！

「彼氏・・・武内さんに？」

いかにも意外という顔のあと、なぜか急にがっくりした顔をして高野くんは立ち去っていった。

「高野くん、どうしてあんなにがっかりしたんだろ？・・・ていうか樹理ちゃん。内藤さんは彼氏じゃないし！」私は周囲に聞こえないように樹理ちゃんに言った。

「そうだったら、嬉しいでしょう？」

「・・・嬉しい」

「素直でよろしい。」樹理ちゃんは、何事もなかったように“どのケーキから食べようかな”とケーキを選び始めた。

第4章：クリスマスまでの過ごしかた。（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

前回、苑子の押しで少し進んだ(?)二人がそれぞれクリスマスを迎えるまでの話です。

次回は内藤サイドです。

(駿介サイド) (前書き)

駿介の過ごし方。の巻

(駿介サイド)

俺の誕生日はクリスマスだ。小さい頃は兄や弟は誕生日ケーキとクリスマスケーキを食べ、プレゼントも2個ずつもらえるというのに自分はケーキは一つだし、プレゼントもちよつと豪華とはいえず、一つ。この不公平感がどうしても納得できなくて俺はクリスマスがあんまり好きじゃない。

12月25日は「メリークリスマス」と「しゅんすけくん たんじょうびおめでとう」のチョコプレートがついたケーキを母が購入するため、ますます自分の誕生日だけが扱いが雑な感じがして余計にクリスマスが好きじゃなくなった。

俺の誕生日がクリスマスだと聡太先輩に教えてもらった武内さんから、ケーキを焼いて持って行きたいと言われたとき、俺は驚いた。思い立ったら即行動の聡太先輩とは違って、おっとりしてるんだなあ、と思っていたけど、やっぱり聡太先輩の妹だ。先輩ほど策士で強引じゃないけど意志の強さは似ている。

以前に食べたケーキも美味しかったし、間違いなく焼いてくれるケーキも美味しいに違いない。

それに、あの小動物みたいな武内さんをむげに断るなんて、俺には出来ない。武内さんを見ると、弟・裕介が以前に飼っていたハムスター“ハムすけ”を思い出す。ちなみに名づけセンスのなさは兄弟共通だ。

武内さんは聡太先輩や伊織さんが男の基準と刷り込まれているようで、俺のことはそんなに苦手ではないみたいだけど、家に来て孝介兄さんや裕介に会ったら驚かれそうなので、外で待ち合わせをすることにした。

話の流れでメルアドも交換することになり、俺はとっくに消した高1の頃少しだけ付き合った女子いらい久しぶりに自分の携帯に女

の子のアドレスを登録したのだった。

その夜、さつそく武内さんからメールが届いた。

「こんばんは。さつそくメールを試してみました。ケーキについて好みを伺いしてもいいでしょうか」

ケーキの好み……。前にもらったキャラットケーキは美味しかったな。が、ケーキの種類言はよくわからない。ただ、生クリームとか、甘すぎるのは苦手なんだよなあ。ケーキを食べるのに向き不向きがあるなら、俺って絶対向いてないと思う。

とりあえず、「こんばんは。内藤です。甘すぎるお菓子は苦手です」と送信した。我ながら、愛想のない文章だよなあ……。

携帯を見ながら、考え込んでいる俺は相当に変だったらしく、兄・孝介が「駿介。携帯見ながら何考え込んでんだ」と不審げに俺を見ていた。

「別に……」「これ以上ここにいと、そのうち携帯をのぞきこまれそうなので俺は自分の部屋に引き上げた。

部屋で受験勉強をしながら、ふと考えたのは武内さんのこと。

どんなケーキ焼いてくれるのかなあ……。俺の返信内容を見て、甘すぎないケーキについて考えているであろう武内さんがなんとなく想像できて、今年はクリスマスが楽しみになってきた。

(駿介サイド) (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介は3兄弟の真ん中です。

第5章：クリスマスの風景 - 1 (前書き)

苑子のお願ひ。の巻

第5章：クリスマスの風景 - 1

樹理ちゃんにも試食を協力してもらった結果、紅茶とチョコレートのケーキを焼くことにした。私はアールグレイが好きだけど、あの香りが苦手な人もいるからダーズリンを入れることにした。

前日に、内藤さんからメールが来た。今まで、私が先に送って内藤さんが返信するばかりだったから、「内藤さん」のメール受信を見てどきどきしてしまった。

「明日の待ち合わせは、14時にあの本屋の前でどう？」

「わかりました。」シンプルなやりとりだけど、私の心は舞い上がりっぱなし。

クリスマスに片思いでも好きな人と約束があるって、なんだか幸せだ。

私が本屋に到着して、程なく内藤さんも現れた。外は寒いので、以前に二人でお茶をしたカフェに行くことにする。

それぞれ注文を終えたので、私は紙袋を内藤さんの前に置いた。

「あの、これ・・・紅茶とチョコレートのケーキです。お口に合えばいいんですけど」

「ありがとう。武内さんの作るケーキは美味しいから食べるのが楽しみだな。」

「そういう風に言ってもらえてうれしいです」

会話が途切れる。

ちょうど、各々注文したものが来たので、私たちは黙って飲み物を飲んだ。

内藤さんと一緒のときは沈黙が続いても全然平気。

「武内さんに、ケーキのお返しをしないとね。」内藤さんが口を開いた。

「お、お礼なんて、気にしないでください！」

「でも、もらいつぱなしだから悪いし。あ、武内さんの誕生日はいつ?」

「1月です」

「ちょうど試験だなあ」

「ですから、気を遣わなくていいですよ?」

「受験が終わったらになるけど、誕生日プレゼントを贈るよ」

「・・・あ。じゃあ、お願いがあるんですけど」

「ん?」

「内藤さんが、合格したら私にも教えてください」

「え?」

「ダメですか?」

「それは構わないけど、それだけでいいの?」

「はい」

「わかった。でも誕生日のプレゼントも渡したいから、何かほしいものってあるのかな」

“じゃあ、私と付き合ってください”なんて言えないし・・・。

「じゃあ、内藤さんの合格を教えてくださいましたら考えますね」

「受かること前提かあ・・・武内さんも言うね」

「す、すみません」

「こりゃあ、絶対合格しないとね」真っ赤になって謝る私を見て、内藤さんが笑った。

カフェでしばらくおしゃべりをしたあと、久しぶりに同じ電車に乗った。

「ショッピングモールに巨大ツリーがあるんですけど、見ましたか?」

「でかいよね。いつも予備校の行きかえりに通りかかると見上げちゃうんだよ」

「私も、いつも見上げちゃいますよ。」

「予備校が終わるとね、ツリーが光ってるんだ。で、昼間にツリー

の説明看板をみたわけ。そしたら8時から10時までライトアップしてらんだって。」

「そうなんですか。知らなかったです」

来年は、内藤さんと見られたらいいな。

第5章：クリスマスの風景 - 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

ケーキをわたして、少しだけ一緒に過ごす二人です。

- 2 (前書き)

伊織、登場。の巻

ケーキを渡したことを樹理ちゃんに電話で報告し、なんとなく伊織お兄ちゃんの話になった。

「伊織さん、彼女とクリスマスは過ぎさないのかなあ。」

「昨年、“おrikunもクリスマスは彼女と過ごせばいいのに”って言ったら“苑子は俺に帰ってきてほしくないのか”って、ずーつと鬱陶しかったから、家では禁句だよ」

「……うわ〜。鬱陶しいイケメン……やだなあ」

「おrikunがイケメンかどうかは知らないけど、ずーつとネチネチ言われるんだよ。鬱陶しいよ。」

「そういうことを伊織さんに言えるのは、苑子だけだよ」

「そう？樹理ちゃんが言っても大丈夫だよ」

「……ムリ。あ、そろそろ伊織さん帰ってくる時間じゃない？」

「あ。そうだ。じゃあね、樹理ちゃん」と私は電話を切った。

なんだか知らないけど、私の周囲では伊織お兄ちゃんって恐れられている。普通に優しいお兄ちゃんなのに。

「ただいま〜。外は寒い〜」黒いマフラーをぐるぐる巻きにし、若干メガネを曇らせた伊織お兄ちゃんが帰ってきた。

「おかえり、おrikun」と私が玄関で迎えると、「おー、苑子！久しぶりだなあ。高校楽しいか？」と夏休みのおきと同じことを言う。

聡太お兄ちゃんに対しては、「よお、聡太」と一言だけ……いいのかな。

「さて、苑子。成績表を見せて。」

「う……うん」

伊織お兄ちゃんが、長期休暇で帰ってきてまずすることは、私の成績表チェックだ。お父さんもお母さんも「帰ってきてすぐ見なく

ても。苑子もがんばってるし」って、言ってくれるんだけど、「プロセスより結果が大事だからね。」と一蹴した。

「・・・夏休みよりは数学の成績も上がったようだね。」成績表のチェックが親より厳しい・・・。

「分からないところは、そうくに教えてもらったから。そうくんのおかげだよ」

「そうか。じゃあ、これからも俺がいないときは、聡太に勉強を見てもらおうようにね」と、伊織お兄ちゃんが成績表を閉じた。

あとは寝るだけになって部屋に戻ったとき、携帯がメールを受信しているのに気がついた。

「ケーキ美味しかったよ。一人で食べようと思ったたら兄と弟に見つかってしまい、兄弟で食べました。」

カップケーキ4個渡してるんだけど。一人一個として、残り1つはどうしたのかなあ・・・

「メールありがとうございます。遅い時間にすみません。4個あったはずなのですが、残り1個は内藤さんは食べることができましたか？」

というメールを送ったら、すぐに返信がきた。

「もらってきた者の権限を使って、俺は2個確保」これにVサインの絵文字がついてきた。

思わず「絵文字、使うんですね」と返信してしまった。

すると「いつもは使わないんだけど、使ってみました」と今度はお辞儀してる絵文字。

今まで、何度かメールのやりとりをしても絵文字を使わなかった内藤さんが使ってる。

またひとつ、内藤さんの新しい一面を見つけた気がした。

・2（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

長兄・伊織を登場させました。・・・さて、どうしようかな。

次の話は、内藤家でケーキをめぐる話です。

武内さんと別れて、家に戻ってくると大学生の兄・孝介と、高校1年の弟・裕介が家で対戦ゲームをしていた。

俺の家は、父親の転勤に母親がついていってしまい、年末まで戻ってこない。

必然的に家事は兄弟で分担することになり、ローテーションを組んで、炊事、共有スペースの掃除、洗濯をこなす。各々の部屋は各自と決まっている。

母親が「男子は家事ができて当たり前」の人なので、今の生活も困らないのは助かる。

「ただいま」と居間に顔を出すと「駿兄ちゃん、お帰り……あ、孝介！今の手は卑怯だろう！！」

「ふん。戦場に掟はあつてないようなものだ……お帰り、駿介。裕介、俺を呼び捨てとはいいい度胸だな。」

「……どうやら、勝負のクライマックスで帰ってきてしまったらしい。」

間もなく、勝負は兄・孝介の圧勝で終わった。

「ところで駿介。お前、どこ行ってたの？」と勝負を終えた兄がお茶をすすりながら俺に聞く。

「……ちよつと、予備校に用事があった。」

「ほお。その割りにお前のカバンは軽そうだな」

「今日は、パンフをもらいに行っただけだから」

「ふうん……」明らかに、兄は怪しんでいる。

「なんか、駿兄ちゃんのカバンから甘いにおいがする！！」と裕介がいつのまにか俺のカバンの近くで言い出す。あいつの鼻は犬並みか！！

「そんなわけないだろ。ちゃんと袋に「ヤバいと思ったときには、兄さんが」さあ、出したほうがいいぞ」とニヤリと笑った。

俺はしぶしぶと武内さんからもらったケーキを二人の前に出した。袋からケーキを出すと、チョコレートと紅茶の香りがする。

「おお〜、うまそう！駿兄ちゃん、これどうしたの？？」裕介は興味しんしんで聞いてくる。

「どうみても女の子からだよなあ、これ。無愛想な駿介がねえ」とニヤニヤする孝介兄さん。

「……先輩の妹さんを専心祭で案内したら、お礼にもらったんだよ」

「先輩って？」

「昨年の剣道部部长の武内聡太先輩だよ。」

「武内……そういえば、弟の聡太は剣道部だったな。」孝介兄さんがぼそりと言った。

「そうだけど、兄さんは伊織さんを知ってる？」そういえば、兄も専心館だから伊織さんと同級生か。

「伊織とは3年間同じクラスで友達だからな……おまえ、伊織の妹に手を出したのか」

・ 3 ・ その頃の内藤家。 - 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介兄・孝介と伊織につながりが！ビバ！！ご都合主義！！（作者の居直り）

書いているうちに、こうなってしまうました。

・2 (前書き)

兄はニヤリ、弟は同情。の巻

「はあ？何言ってるんだ。付き合ってもないのに、手なんか出すか！」俺は伊織さんと兄のつながりに驚きつつも、兄の言葉につい声を荒げてしまう。

「今はまだ、だろう？これから先はないって言い切れるか」「え。」

「専心祭で案内をしたってことは、伊織の耳には入ってるだろうね・・・」と兄が言いかけたところで、兄の携帯電話が鳴った。

俺たちに断って、兄が電話を取った。受信画面を見て一瞬驚き、あわてて電話に出た。

「もしもし・・・お、久しぶりだなあ。元気かよ。時間？大丈夫だけど・・・え？駿介は俺の弟だけど・・・」

どうやら伊織さんからの電話らしい。

「そうだな。受験生だから、合格発表が終わったら煮るなり焼くなり好きなようにしてくれよ・・・お、いいねえ。じゃあ明日な」

電話を切った後、孝介兄さんは俺を見てニヤリと笑った。

「よかつたな駿介。受験期間中のお前は無事だ・・・さあ、ケーキ食おうぜ」

「ちよつとまで、兄さん。どういうことだ」

「妹に激甘で過保護な兄が、その妹に手を出しそうな男の顔を合格発表が終わったら見たいんだってさ。頑張って受からないと、認めてもらえねえな。頑張れよ」

「はあ？どうしてそうなる。」

「駿兄ちゃん、大変だなあ」裕介に同情されてしまった。

そういえば、裕介は泰斗の1年生だ。武内さんのことを知ってるだろうか。

「裕介、このケーキをくれたのは武内苑子さんと言って、お前と同

じ泰斗の1年生なんだけど知ってるか？」

「え？1年生の武内？・・・うーんと、もしかして図書委員かな」「うん。たぶん、その子だと思う。前に図書委員会のミーティングで、とか聞いたことがあるから」

「それなら知ってる。俺、バスケ部じゃない？同じ部の高野がその子のこと好きみたいでさ、なにかと行動してるんだけど、ことごとく玉砕してる。でも、駿兄ちゃんが相手じゃ、高野に勝ち目はないね」

武内さんのことを好きな男がいる・・・なんだか面白くない。玉砕しているというのは気の毒だけど、ちょっと嬉しいのはどういうわけだ。

なんで、俺は俺だけの武内さんって考えちゃうんだろう。

ケーキをもらってきた者の権限を主張して、2個を確保した俺だけど心の中に浮かんだ武内さんに対する独占欲が消えない。

ケーキの感想を書いたメールを送った後、しばらくたって武内さんから返信がきた。

一度も使ったことのない絵文字を使ってメールしたところ、「絵文字、使ってますね」というメールがきた。

高野ってヤツはきつと、彼女のメルアドも知らないしメールもやり取りしたことがないだろう。俺はちょっと優越感を覚えてしまった。

それにしても、武内さんに対する独占欲・・・これって、やつぱり小動物に対する気持ちとちょっと違うような気がする。兄さんから「これから先はないって言い切れるか」と言われたときに「ない」とは言いたくなかった。

うーん、とりあえず考えを切り替えて、勉強しよう。合格を武内さんに教えられるように、きちんと彼女に向き合えるように。

・2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介の気持ちに変化が現れた!!しかし、勉強に逃げた。

(某ゲームのコマンド風にお読みください)

・ 4 ・ その頃の武内兄弟。 (前書き)

伊織は何でも知っている。の巻
聡太視点です。

- 4 . その頃の武内兄弟。

苑子が自分の部屋に引き上げたあと、居間は俺と伊織兄さんの二人になった。

俺と伊織兄さんは仲が悪いわけではないけど、性格が違うせいかなりシंकクロするところがない。付き合ってる友人のタイプも違うし、付き合う彼女のタイプも違う。

「伊織兄さん、夏休みいらいだね。」

「そうだな。苑子の勉強見てやってるんだな」

「あゝ・・・ちよつと苑子に借りがあつて」

「へえ・・・それは、内藤駿介に関することか？聡太」

俺は飲んでる水を噴出しそうになった。なんで知ってるんだ？伊織兄さん！

「なんで知ってるかって？お前、専心祭に苑子と行って内藤に案内してもらっただろう。それを俺の知り合いが見かけて教えてくれたの」

「卒業して3年もたってるのに、なんで兄さんの知り合いがいるんだよ」

「お前ね、俺をなめてもらっちゃ困る。3年間生徒会にいたんだからね。専心祭には生徒会のOBだって来てるだろうが。」

そうだった。兄さんは、1年から生徒会にいて3年には会長だった。おまけに総代で。

入学した当時、「武内伊織の弟」ということで、変な注目を浴びたんだつた・・・。

「内藤はいいやつだよ。苑子は見ると思うけど」

「まあ、そうだろうね。苑子が見る目がないわけがない。俺たちを見てるんだからな。ついでに内藤駿介君の兄、孝介は俺の友人だし。

孝介はいいやつだから弟も悪いヤツじゃないだろう」

「だったら、余計な口出しはしないほうが」

「口出しはしない。でも、観察はしたいもんだな」

伊織兄さん・・・兄さんの『観察』って『口出し』と同じように聞こえるのは俺だけか？

兄さんは、そういうと何処かに電話をするために携帯電話を取った。

「もしもし・・・俺だ。久しぶりだな、孝介。伊織だよ、元気か？今、時間は大丈夫か？ところで、内藤駿介君って孝介の弟だよな。

実はな、受験勉強の最中は迷惑になってしまうから、合格発表が終わった後に弟さんに一度会いたいんだけど、かまわないだろうか？

・・・そうか。ありがとう。ところで、俺、正月明けまでこっちにいるから、一度飲まないか？明日の都合はどうか。そうか。じゃあ、

明日」

「兄さん。苑子と内藤はまだ付き合ってもないのに」

「友人の弟で、お前の後輩を一度見てみたいだけだし・・・じゃあな、俺もう寝るわ」

居間に一人残された俺は、思わず頭を抱えてしまった・・・

すまん・・・内藤。俺がお節介を焼いたばかりに、合格発表のあとに厄介なヤツの相手をさせることになってしまったよ・・・無事、合格してくれよなあ。

あとで、内藤に会ったときに謝ったほうがいいか・・・それより

伊織兄さんの攻略法（あるのか疑問だが。ちなみに兄さんの一番の弱点は苑子だ）を一緒に考えたほうが実用的だろうか・・・。

次の日、朝から伊織兄さんは付きっ切りで苑子の部屋で家庭教師だ。

どうやら、自分がいる間に冬休みの課題を終わらせる算段のようで、時折聞こえてくる教え方に容赦ってものがない。伊織兄さんっ

て・・・ぜってーSだ！！S！！

苑子のほうは「早めに課題を終わらせて、大晦日からのんびりしたいだろう？正月も勉強したいのか？苑子は」と伊織兄さんに言われて「それはやだよ」と、兄さんに乗せられて課題をこなしている。

自分の部屋でレポートを書きつつ、俺は苑子に心の中でエールを送った。

- 4 . その頃の武内兄弟。 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

聡太は頭を抱えて、ちょっとあたふた。

次回からは `three steps` に入ります。

第6章：1・図書室で遭遇（前書き）

図書室で出会ったのは・・・の巻。

第6章：1・図書室で遭遇

3学期が始まって、内藤さんと同じ電車に乗ることはなくなった。あと1週間くらいで試験が始まる。体調万全で頑張っしてほしいなあ……。

今日は図書室当番で、私と一緒に当番をしているのは涼乃先輩だ。図書委員も泰斗祭が終わって、3年生が引退。委員長も、瑞穂先輩から恵先輩に交代した。

少しずつ季節は進んでいるんだなあ……なんて私はぼんやり考えていた。

「そのぼん、ボンヤリしちゃってどうしたの？」涼乃先輩の声で我に返った。

「あ……すみません。何でもないです。ただ、3年生の方はこれから試験が本番だなあ、と思って」

「そうだね。3年生の先輩たちには頑張っしてほしいよね。」

「はい」

「なんかさー、4月には3年生だって実感がイマイチわかないんだよねえ」

「わかりますー、私も2年生になるって実感あんまりないです」

「先輩は何人入ってくるかなあ、4月には“そのぼん先輩”だね。そのぼん」

先輩って呼ばれてる自分の姿が想像できない……。

しばらくすると、返却本がたまってきたので私は涼乃先輩にカウンターを任せて返却ワゴンに本を載せて、返却作業をすることにした。

私が本を棚に戻していると「武内さん、だよな？」と知らない男の子から声をかけられた。

「はい？」私は作業の手を止めて、男の子のほうをみた。どこことなく内藤さんに似てるけど・・・誰だろう。

「ごめん、いきなり声かけて。俺、3組の内藤裕介。兄の駿介がお世話になってます」

「え・・・いいえ、こちらこそ、内藤さんには兄が面倒かけたりしてて・・・」

図書室でお辞儀しあってる私たちってなんか変、なのかなあ・・・なんか周りが見てる。

「・・・同じ学年なのに、敬語も変だね。タメ口でいい？」

「は・・・う、うんっ。いいよ」

「駿介兄さんにあげたチョコケーキなんだけど、ごめん。俺と一番上の兄・孝介も食べちゃったんだ。」

「内藤さんに聞いた。もらった人の権限で2個キープしたってメルもらったよ」

「そうそう。うちは男ばかり3兄弟で、食べ物争いは過酷なんだよ」

「へえ、そうなんだ。うちは兄2人と私だからかな。そういう争いつてないよ」

内藤くんのおどけた調子の言い方に思わず噴出してしまふ。内藤さんの弟だからかな。なんだか話しやすいや。

「あのさ、武内さん。俺が言うのもなんだけど・・・駿介兄さんつて、無口で無愛想でとっつきにくいところがあるんだけど、よくみると表情がある人なんだ。見捨てないでね」

「は？」見捨てるつてなに。

内藤くんは「ごめんなく、いきなり訳わからないこと言つて。でもさ、どーしても言っておきたくて。じゃ、おれ部活あるから」と本棚から立ち去っていった。

「いったい、なんなの・・・」私は、ぼんやりと内藤くんが出て行った方向を見ていた。

でも、なんとなく分かるのは、きっと内藤くんはお兄さんに自分の発言を知られたくないのかなあってこと。

もうすぐ試験の内藤さんにメールで「弟さんに会いました」なんてメールするのも悪いし。

「うん。忘れよう。とりあえず、仕事しよ」「私は、その後ひたすら本を戻すことに集中した。」

第6章：1・図書室で遭遇（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

「図書委員会」の涼乃を登場させてみました。

2・内藤裕介の観察（前書き）

内藤家兄弟、語る。の巻

駿介の弟・裕介視点です。

2・内藤裕介の観察

駿介兄ちゃんにケーキをくれた女の子は、俺と同じ高校で同じ学年。

兄ちゃんが非常にお世話になった先輩の妹だそうで、いつも無愛想な兄ちゃんが妹さんの話しをしているときは和らいだ顔をしているので、俺は俄然興味を持った。

同じバスケ部の高野がアタックしては玉砕している武内さんと妹さんが同一人物だと知ったときはちよつと驚いた。高野も悪いやつじゃないんだけど、兄ちゃんたちが言う武内さんのお兄さんたちの話を聞いてると、・・・高野の場合は武内さんのお兄さんたち之間違いなく排除されそうな気がする。

武内さんの顔はなんとなく分かるけど、クラスに直接行くのもなんだか誤解を招きそうだし、やっぱり図書室で偶然を装って接近するのがよさそう。そこで、俺は放課後に図書室に通ってみることにした。

通ってみて3日目。どうやら武内さんの当番の日に当たったらしい。武内さんが、カウンターを立ったのを見て、俺はさりげなく本を見て回ることにした。

本を棚に戻している彼女に声をかけた。最初、若干ビビりながらこちらを見たもののどうやら俺が駿兄ちゃんと似ている部分に気がついたみたいで、いくらか態度が軟化した。名前を名乗ると完全に安心したようだった。

俺は、彼女と話していて駿兄ちゃんがどうして和やかな表情をするのかが分かった気がした。武内さんは外見もふんわりしてるけど、性格も何だかほのぼのとしている。側で話するとまるで公園で日向ぼっこしているような感じになってくるのだ。

部活に行かなくちゃならなくなって、焦った俺は思わず武内さんに「兄ちゃんを見捨てないでね」って言い逃げしちゃったけど、きっと本人はなんのことも分かってないと思う。

家に帰ると、駿兄ちゃんはまだ予備校から帰ってきておらず、なぜか孝兄ちゃんが家にいる。

「孝兄ちゃんがいるなんて、珍しい。コンパはどうしたんだよ」

「……おまえね。俺だって早く帰ることくらいあるんだよ。メシ作ってあるから、食べよ」

「ありがと……そういえば、孝兄ちゃんは伊織さんの妹に会ったことある？」

俺が夕飯を食べるのに席に着くと、孝兄ちゃんがテーブルの向かい側に座って茶を入れてくれた。

「ない。伊織は俺らがあいつの家に行くときは、妹に出てこないように言ってたみたいだし。」

伊織さんって、徹底してるなあ……

「俺。今日、妹さん……武内さんと話をしたよ」

「へー、どんな子？伊織似？」

「伊織さん見たことないから分からないけど、外見がふんわりしてて性格がほのぼのしてる感じの子だよ」

「まじで？伊織と全然似てねえ……」

「伊織さんって、どんな人？」

「文武両道。腹黒。俺様。身内には優しいが、やられたことには3倍返し。……簡単に言うなら、敵にはしたくないタイプだよ。」

内藤家の曲者大王・孝介兄ちゃんにそこまで言わせる伊織さん……俺も敵に回したくないな。

「孝兄ちゃん、俺、思わず武内さんに“駿兄ちゃんを見捨てないでね”って言っちゃったよ。」

「はあ？お前ね……まだ付き合ってもないのに、ワケわかんねえこと言ってるんじゃないよ」

孝兄ちゃんは、すっかり呆れた様子で俺を見る。

「うん・・・武内さんもワケわからんって顔してた」

俺は、孝兄ちゃんに呆れられて自分の発言を改めて反省した。武内さん、忘れてくれるといいんだけどなあ・・・。

2・内藤裕介の観察（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

図書室で出会った後の話です。

3・メールやりとり（前書き）

苑子、メールで悩む。の巻

3・メールやりとり

図書室で知り合っているらしい、私と内藤くんは学校で顔を合わせると話をするようになった。

「武内さん、駿介兄さんの試験終わったみたいだよ。」

「へへ、そうなんだ。」

「メールしてみたらいいのに」

「え・・・忙しいだろうし。」

「大丈夫だよ。俺に聞いたって言って送ってみなよ」

「そうかなあ」

「大丈夫だよ。駿介兄さんは迷惑な人間にはメルアドなんて教えないから」

内藤くんの言葉に勇気付けられて、私は今年に入って初めてのメールを送ってみることにした。

クリスマスときはケーキを渡すからって口実があったからメールを送りやすかったけど、何でもないときに送るので・・・送りづらい・・・。

居間で携帯をじっと見つめていると「・・・苑子、なにやっているの？」と怪訝そうに聡太お兄ちゃんがこっちを見ている。

「うわあ！そうくん。驚かさないでよ」

「お前が勝手に驚いたんだろうが!!」

「う・・・ごめん」

「内藤なら試験終わったから家にいるんじゃないの？」とニヤリとする聡太お兄ちゃん。

「ふ、ふーん。そうなんだ。・・・部屋に行こうかな」

聡太お兄ちゃんのニヤニヤ顔を見るのもイヤなので私は自分の部屋でメールを出すことにした。

「こんばんは。内藤さんの弟さんから試験が終わったと聞きました。お疲れ様でした」

これだけの文字を打つだけなのに、どうしてこんなに緊張するんだろう……。それに何度、訂正したことか。

それでも何とか送信すると、すぐに返信がきた。

「こんばんは。試験がなんとか終わったので、ひと休み。無事合格してるといいんだけど」と汗かいた顔の絵文字がついてきた。

「内藤さんなら大丈夫ですよ」と私も力こぶの絵文字をつけてみる。「合格してたら、次は武内さんの誕生日祝いだね。何がいいか考えてる？」

「合格してたら、教えます」

「じゃあ、合格してないと困るなあ」の文章に困った顔の絵文字がついたメールが返ってきた。

そういえば、内藤さんの志望大学ってどこなんだろう……。ずっと聞いてみたかったんだけど、今聞けば教えてくれるのかな。

「今さらですけど内藤さんは、どちらの大学を受験されたんですか？」と送ってみた。

返信は「武内さんには内緒です。合格発表後のお楽しみってことで」

思わず「えー！」と叫んでしまった。

いったい内藤さんはどこを受けたんだろう??

3・メールやりとり（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介からのメールに惑わされる苑子でした。

第7章：1 伊織と駿介（前書き）

約束のご対面。の巻

第7章：1・伊織と駿介

3月。俺はネットで本命の結果発表を確認し、無事に合格が決定した。

大学からも書類が来て、直接持ち込みでもいいらしいので俺は大学に持ち込むことにした。

ここで、なぜか兄・孝介が「駿介、俺も行くよ」と言い出した。一人で行くよ。「俺はもちろん断る。」

ところが、孝介兄さんは「俺も駿介の入学する大学見たいしさ」と言っつて譲らない。

なんで、書類を提出するだけなのに兄と二人でいかなきゃいけないんだろっ……。

大学に書類を提出し、兄と二人でぶらぶら大学内を歩く。

「お前、ここに通うんじゃ家を出るのか？」

「家から通うよ。通える距離だし」

「ふーん、そっか。さて、そろそろ来る時間だな」

「は？」

「お前、クリスマスの時の話、覚えてるか？」

「クリスマス……武内さんにケーキをもらって……あ。」

「孝介兄さん……まさか」

「お前、ここ伊織が通ってる大学だつて知らなかったのか？」

「……嘘だろ」伊織さんの話はときどき聡太先輩から聞いてても、通ってる大学まで知るわけがない。

「俺が、こんなことで嘘なんかつくかい。……お、来た来た。」

伊織、「こつち」と兄が手を挙げた。

「孝介、ひさしぶりだな……そちらが弟の駿介君だね。初めまして。武内伊織です。弟と妹がお世話になってます」

目の前に、伊織さんがにこやかに立っている。でも、目が……

確実に俺を値踏みしている。

「君が一目でわかるように、孝介と一緒に来るように頼んだんだ。悪いな、孝介」

「クリスマスに伊織から念押しされちゃったからな。お前に逆らうと後が怖い。」と孝介兄さんが笑う。

伊織さんはちよつと笑つて、次に俺のほうをみた。

「入学手続きは終わった?」

「はい。あとは親が学費を振り込んでくれますから」

「それはよかった。合格おめでとう」

「ありがとうございます」

「・・・悪い、孝介。ちよつと駿介君と二人で話したいんだけど、いいかな」

「別にいいけどさ。伊織、うちの弟をあまりいじめないでくれよな。俺、その建物の中にいるから終わったら電話くれよな」と孝介兄さんは俺と伊織さんから離れた。

「苑子には合格したことを教えた?」

「いえ・・・まだです。でも、合格したら教えてほしいと言われたので、教える予定です」

「そうか・・・確か、今年の夏に君と俺、会ったことあるよね」

「はい。妹さんと一緒でしたよね」

「記憶力はいいらしいな。でも、まさか君と苑子のことを話す日にくるとはね」

「は?」

「単刀直入に聞くけど、苑子のこと、どう思ってる?」

この質問は、前に聡太先輩にも聞かれた。そのときは小動物みたいで面白いと答えただけど、今は・・・。

「俺と妹さんが付き合うことになったら、伊織先輩はどう思いますか」俺は伊織さんの目をまっすぐ見た。

「俺は、君が苑子を傷つけたり、裏切ったりした場合は容赦なく潰

してやるうと思ってる。でも今のところは聡太の後輩でそんなに悪いヤツでもなさそうだし・・・何より、君にちよっかいを出したと苑子にばれると怒られるからね。苑子は普段温厚なだけに、怒ると怖いぞ？覚悟するんだな」

伊織さんはにこやかに笑って、俺の肩をたたいた。

俺は「そうですか」としか言えなかった。とりあえず、敵に回さなくてよかった気がする・・・。

第7章：1・伊織と駿介（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介は、とりあえず伊織に合格点をもらえたようです。

それとも苑子に怒られたくないだけか？

2・方向決定（前書き）

自覚する男。の巻

2・方向決定

孝介兄さんが伊織さんからの電話で俺と合流し、伊織さんは「大学に用事があるから、ここで」と言ったので、孝介兄さんと俺は家に戻ることにした。

「駿介、伊織と実際話してみようだった？」

「……顔を合わせたときに、目が笑ってなくて俺を値踏みしてたのはすぐ分かった」

「……えーと。そりゃまた……」

「でも、最後はしぶしぶだろうけど、認めてもらえた気がする」

「ほー、よかつたな……お前、この大学でうまくやれるよ、きつと」

「は？」

「きつと、駿介の立場が正しいのに理不尽な目にあつたときは伊織が助けてくれるよ。妹の彼氏だかな。」

「……まだ彼氏じゃないんだけど」

「お？まだってことは。その気あるのか……えー、もしかすると将来、伊織と義兄弟かよ……うわ、喜ぶべきか恐れるべきか。」

「どうして、そんな展開になるんだよ!!」「ここは、つつこむべきだよな、俺。」

孝介兄さんはおや？という顔をして、「伊織に「妹の彼氏候補」として認定されたのに。」さらつとという。

「……先のことはともかく、付き合ったらちゃんと真面目に付き合おう。」

「そうだよな、駿介はそういうヤツなのを、俺はちゃんと知ってる。」

「孝介兄さん、伊織さんって確かに威圧感あるよね」

「そうだな。あいつは1年生のときからあんなで、最初は俺もび

びつたけど、なんか慣れた」

そりゃー、たぶん兄さんも同類だからだよ……。

伊織さんに言われたことや、孝介兄さんと話したときのこと、自分の思っていることを改めて考えた。

小動物みたいで面白いつて思ったのは本当。だけど、彼女のことを知っていくとそうじゃなくなってきたのも本当。

彼女の事を好きな男がいる話をきいてムカつとしたものの、それが玉砕続きだと聞いてちよつと喜んじやつたり……。

彼女のことは、大事にしたい。自分の側にいてほしい。

俺は、ようやく自分の気持ちに気がついたのだった。

武内さんに直接会って、合格したことと自分の気持ちを伝えなくちゃいけない気がして、俺は彼女にメールじゃなくて電話をすることにした。

電話をもらうことを予測してなかったみたいで若干焦った感じが出た彼女に、今度の休みの日に外で会いたいと伝えたところ、かなり驚いていたがOKしてくれた。

思えば、自分から女の子に会いたいと伝えたのも、武内さんが初めてだ。

2・方向決定（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きいちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

どうしても書き出すまでに時間がかかり・・・毎日更新が危うくなるところでしたが、なんとか書きたいことを書くことができました。次回から最終章です。

第8章：next step! - 1 (前書き)

苑子、動揺の巻

短めです。

第8章：next step! - 1

部屋でのんびりしていたら、携帯の着信音が鳴った。画面を見ると内藤さん!!

しかもメールじゃない!! どうして??

焦った私は、思わず上ずった声で「ははははは」と出た拳句に携帯を落としそうになってしまった。

「内藤です。今、時間はだいじょうぶ?」

「は、はいっ」

「今度の日曜日は、武内さん空いてる?」

「日曜、ですか? はい、特に用事はないです」

「じゃあ、俺と・・・その、会う時間ってあるかな」

「え・・・」私は自分の耳を疑ってしまった・・・もしかして、これは「デート」というやつですか!!

ど、どうしよう。落ち着け、私。

「武内さん?」内藤さんの声がなんだか心配してるっぽく聞こえる。

「はははは。大丈夫です、日曜日。」

「よかった・・・じゃあ、あのショッピングモールの前で」

「ツリーのあったところですか?」

「そうそう。」

「わかりました・・・えっと、何時頃に行けばいいでしょうか」

「そっだなあ・・・11時ごろなんてどう?」

「はいっ。分かりました」

「じゃあ、日曜日に」

「はい、日曜日に」

.....。

電話を切ったものの、私はじーっと電話をそのまま眺めた。今、デートの約束したよね、内藤さんとのデートの約束。

「あ！！服！！何着ていこう！！」

私は、クローゼットの中身を全部部屋に並べて、その後、聡太お兄ちゃんが顔を出して「ちよつと苑子・・・わっ！！おまつ！！なんだ、この服とバッグの山は！！」と驚かれたのだった。

その後、なんとか服とバッグを決め、玄関で靴をチエックし終えた。

あとは、日曜日が晴れるといいなあ・・・。

第8章：next step! - 1 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

最終章になります。

- 2 (前書き)

苑子、無自覚に決定打。の巻

緊張のあまり、家を早く出すぎて私は20分前に待ち合わせ場所についてしまった。

クリスマスのはときは巨大ツリーが飾られていたけど、今はクロッカスと水仙の鉢植えがその跡地できれいに並べられて咲いている。

その花壇を囲むようにベンチがあるので、私はその一つに座って内藤さんが来るまで、読みかけの本を開いて待つことにした。すると、本の上に影が差した。見上げると、高野くんが私の目の前に立っていた。

「武内さん、ここで何してるの？」

「待ち合わせしているの。高野くんは？」

「俺は、ちよつと買い物に来たんだ」

「そうなんだ。」私は、本に視線を戻すのも高野くんに悪い気がして、本をバッグの中に戻した。

「武内さん。待ち合わせって言うてたけど、だいぶ前から待ってない？」

「あ……私、早く到着しちゃったから」

「ふーん。そうなんだ」と高野くんはなぜかうれしそうだ。

「待ち合わせって、遠山？」

「違うよ。ごめんね、今日は樹理ちゃんと待ち合わせじゃないんだ。」

「え？もしかして、武内さんって」

「は？」

「あの、俺は……」と高野くんが何か言いかけたところで、「武内さん、遅れてごめんね」と内藤さんが現れた。

内藤さんは、高野くんを見て「武内さん、知り合い？」と私に聞いてきた。

「はい。内藤さん、同じクラスの高野くんです」

内藤さんは「ああ、君が高野くん」と何事か納得していた。「高野くん、初めまして。内藤です。君と同じバスケ部の内藤裕介の兄です」と声をかけた。

「え。内藤・・・くんのお兄さんですか。ど、どうも初めまして・・・あ、武内。俺、いくわ。じゃあな」

高野くんは、なぜかちよつと焦った様子で、そそくさと立ち去っていった。どうしたんだろう？樹理ちゃんじゃなかったから、がっかりしたのかなあ。

「武内さんは、何時頃に到着したの？」

内藤さんは、私の隣に座った。

「遅刻しちゃいけないと思ってたら、20分前に到着しちゃったんです。」

内藤さんが、プツと吹き出した。私はたちまち恥ずかしくて顔が赤くなってしまふ。

「ご、ごめんね。実は、俺も遅刻しちゃいけないと思って10分前に到着しちゃったんだ。」と内藤さんが笑った。

確かに、時計はまだ11時になってない。

「さっきの、高野くんだったけ？いつもあんな感じなの？」

「はい。高野くん、私の友達が好きみたいなんですけど、なぜか私にも話しかけてくるんです。」

「あー、そうなんだ・・・裕介の言ってたことと違うな・・・」

「え？何が違うんですか？」

「なんでもないよ。」

内藤さんはニツコリ笑って、私の質問をはぐらかした。

ここは聞いてみたいけど。でも、お兄ちゃんたちがニツコリ笑って質問をはぐらかすときの顔と、今の内藤さんの顔が似ていたの、私はなんとなく聞きそびれてしまった。

- 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介 vs 高野は、駿介の勝ちです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095y/>

Approach with one step ,two steps, three steps

2011年12月13日10時47分発行